別府を西南戦争の戦火より守った五人

安部和也

この話しは、西南戦争に別府より中津隊員として西郷軍に参加し、日向和田峠の戦で負傷、戦争終結から五年に亙る隠遁生活の後別府に帰還した堀助七より、当時の経緯（いきさつ）を聞かされていた娘の南マル（楠町南保雄氏の祖母）が、生前話してくれたものをまとめたものです。

西南戦争は、明治十年（一八七七）二月一五日、西郷隆盛に率いられた一五〇〇〇の西郷軍の熊本城攻撃によって始まった。西南戦争の戦況は、田原坂の攻防戦を境にして、西郷軍の敗色が濃厚となった。その四月一日の昼過ぎ、西郷軍に呼應して明治新政府に反抗する不穏分子を警戒中の、大分警察別府分署に大分県令よりつぎのような命令が下がった。「今日未明、豊前中津の旧奥平藩士等の不平士族、約六〇名が蜂起して徒党を組み、中津城と警察を襲撃して、武器弾薬を奪った後、南下している。別府分署の全員は直ちに、銭瓶峠に出陣した警察隊に合流して賊を迎撃せよ」。当時の別府分署は、現在の秋葉通りと中浜筋との交差点の南東側にあった。建物は明治維新の混乱した治安を警固する為に、民間人勇志で結成された自警団の詰所として使用していた家屋であった。当時、自警団員であった佐藤感一、佐藤茂十郎、佐藤猛太郎の佐藤一族の三名を大分県令は現地採用で警察官に任命し、別府分署に配属していた。

銭瓶峠に出陣命令を受けた佐藤一族出身の警察官三名は、期するところあって予（かね）てより準備していた辞表を分署長に提出した。そして出陣準備に追われている署員に別れを告げて一族の堀助之丞家に行き、同家の主人堀助七とともに親族の矢田宏の到着を待った。

数刻を待たずして宏が到着、直ちに今後の行動について協議を行い、矢田宏を隊長に五名で別府隊を結成し、自由民権のために戦うことを誓いあい、中津の決起部隊とともに西郷軍の援軍に赴くことに決した。

増田宋太郎に率いられた約六〇名の決起部隊は、隊名を新政党別軍を名乗り、当日夜半にも別府に到着して、食料と軍資金を調達した後、銭瓶峠を通って府内攻撃に向うことが予想された。彼らはもし、宋太郎が我々の予想する作戦を行な

えば、別府は戦場となって村は焦土と化し、多くの村人が犠牲となること間違いない。また、新政党別軍は警察隊に包囲されて全滅させられるであろう。別府を戦火より守るためにも、同志を救うためにも、絶対に宋太郎等を銭瓶峠に向わせてはならない。さらに、今、我等同志が西郷先生のために、ここでしなければならないことは府内攻撃ではない。それは一日も早く同志全員が、無傷のまま西郷軍に合流して、ともに戦い戦局の転換をはかるより外は無い。そのため部隊を別府の裏山越しをさせて玖珠に入り肥後小国に抜ける作戦しか無いことを、宋太郎に勧告すべきだと考えた。

翌二日、まだ夜の明けぬ時刻に亀川に到着した宋太郎に、宏は一人で出むき作戦の変更を勧告した。

「別府の我々五名は、明治新政府を打倒して自由民権政府樹立のため西郷先生のもとで、戦うことを決意して別府隊を結成した。隊は西郷軍の援軍に赴く予定だ。

隊員の中に昨日迄、別府分署の警察官であったものが三名いる。彼等の情報によると、大分警察隊は貴殿の部隊が銭瓶峠を通って府内攻撃を行い、豊肥街道経由で肥後の西郷軍のもとに赴く作戦を予想して、銭瓶峠に銃火器を装備した迎撃部隊を配置し、陣地を構築して貴殿の部隊を殲滅する作戦をたて、待ち伏せしている。兵力装備とともに優勢なる警察隊の陣地を、攻略することは非常に困難な事だ。もし、警察隊の陣地攻略出来ず部隊を別府に退却させて、別ルートで肥後に向う作戦を取った場合、大分警察隊はすかさず府内の本隊を海上より別府に上陸させ、貴殿の部隊の退路を遮断して峠の警察隊と挟み撃ち共同作戦を行うので、貴殿の部隊は大損害を蒙るだろう。こんな危険な作戦は今直ぐに中止して、部隊をこのまま裏山越えをさせ防備態勢の整っていない玖珠を通って肥後小国に抜け、西郷軍に合流する作戦に変更すべきだ。この作戦は警察隊の裏をかいた作戦ゆえ警察隊の攻撃を受けることは無く、別府より二日の行軍で西郷軍に合流が出来る事を確信しての作戦だ。

いま、西郷軍は大変苦境にたたされており、この時期に『豊前中津より我が同志の戦闘部隊が、一兵も損じることなく敵中を横断して、全員無傷で、今、到着した』とのニュースを全軍にながせば、全将兵の士気を鼓舞することになるだろう。それが、いまだに決起せぬ同志の決起を促し、西郷先生とともに自由民権の旗の下に総力を結集させ、全員一丸となって、いまの難局を乗り切る作戦こそ西郷軍にとっては、如何なるものにも優る価値あるものと思われる。

貴殿が別府隊の勧告に同意して、このまま別府を素通りして裏山越えで玖珠に向う軍を約束して呉れれば、今度は我々別府隊が貴殿の部隊とともに西郷軍の援軍に赴く事を約束する。もし勧告を無視して、あくまで銭瓶峠に向うとなれば別府隊は、西郷軍に味方して共に戦うとの大儀を捨て、別府を戦火より守るために村人と協力して、貴殿の部隊の別府進入を阻止する決意だ」と。宏の話を無言で聞いていた宋太郎は「わかった、別府隊の勧告に随う事を約束する」と宏を帰した。

翌、三日になっても宋太郎に率いられた新政党別軍は北石垣に止まったまま、約束通り別府進入は行わず、しばしの休養をとっていた。その間一部の兵は海上より府内に上陸して、府内城を攻撃した後、再び別府の本隊に帰隊している。

一方、別府隊の五名は宋太郎との約束を果たすため、身の廻りを整理して一族でかき集めた軍資金を持って新政党軍に参加した。間もなく警察隊の主力が府内を出発して別府に向ったとの報告を受けた宋太郎は、警察隊との交戦をさけて急遽、新たな同志を加えた部隊を玖珠に向けて出発させた。

彼等は予定通り警察隊に遭遇することもなく、五日に肥後大津で西郷軍との合流に成功、新政党別軍の隊名を中津隊と改め、西郷軍の精鋭部隊となって各地の戦闘に参加、勇名をはせた。彼等が中津隊に参加するとき持参した軍資金は、その後の食料調達に大いに役立ち、他の西郷軍に羨ましがられたのである。

銃火器を装備した政府軍の攻撃で、西郷軍は日増しに劣勢となり重大なる局面を迎えた。西郷軍は、再起を期しての撤退作戦続行した。八月一五日、中津隊を含めた西郷軍残存兵員三〇〇〇人の総力で、政府軍に決戦をいどんだ日向和田峠の戦闘は、死闘を繰り返す大激戦で西郷軍は惨敗を喫した。

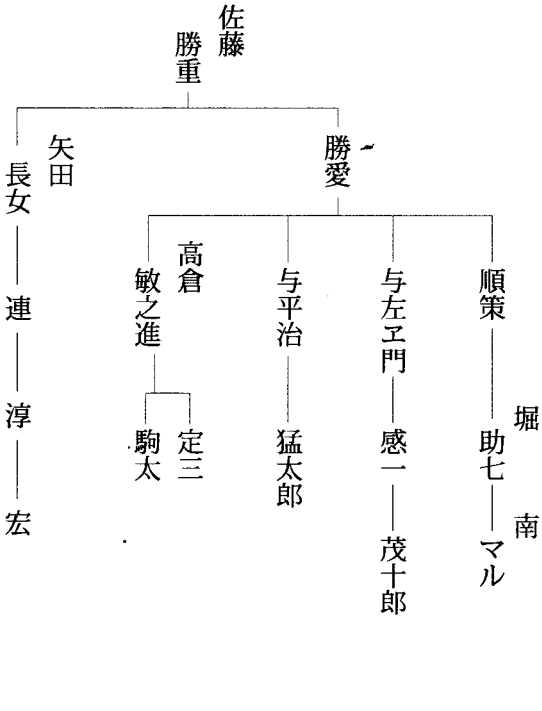
この戦いで佐藤感一（四二才）佐藤猛太郎（三〇才）の両名は戦死、堀助七は負傷して戦線を離脱、行方不明となった。峠の戦いに敗れた西郷軍は政府軍に包囲され、その包囲網突破を試みた一八日の可愛獄の戦闘で、佐藤茂十郎（二三才）も戦死した。別府隊で一人残った矢田宏は、脱出に成功し西郷隆盛を扶けて撤退を続け、鹿川で敵弾を受け負傷した。しかし、尚も西郷を護って行動をともにし、九月三日、城山に西郷を送り届けた後、野戦病院に入院し政府軍の捕虜となった。

ここに、別府を戦火より守った別府隊は、三人戦死、一人行方不明、一人捕虜と言う悲惨な結末をむかえて全滅したのである。

西南戦争より一〇〇年以上もたったいまなお、矢田宏には多くの信奉者があり、高い評価で語り続けられているが、ともに戦い大いなる犠牲を払った佐藤一族の四名については、全く知らされていない。その点について南マルは次の様に説明して呉れた。

「当時、西郷軍を賊軍と呼び、これに加担する者は国賊として処罰するとの布告が出ており、累が一族に及ぶ事を心配した彼等の従兄弟で、当時の別府村村長高倉定三と、彼の弟で初代別府町町長になった駒太兄弟によって、戦死した感一、猛太郎、茂十郎の三名は、戦争とは関係なしの病死として届出された。行方不明となっていた堀助七については、佐伯大入島で傷の手当をしている事が判明したが、別府への帰還を許されず、行方不明で押し通した。一族より四名の者が西郷軍に加担した事実が、政府側に知られる事を警戒して、村人には村長の地位を利用した緘口令を出すなどの、事実の隠ぺい工作を取ったため、佐藤一族は国賊の汚名をきせられることは免かれた。それと引き換えに、彼等が矢田宏とともに西郷隆盛のもとで自由民権のために戦った事実は、全ての記録より削除されヤミに葬られたのである。このため一族の者以外には、この話しは語り続けられることはなかった」と。

大正二年、二豊新聞社発行、増田宋太郎伝（中津図書館蔵書）には、別府よりの中津隊参加者について次の様に記されている。

「別府より宮本舎人（宇和島）矢田宏（別府町）中村勝太郎（別府町）石松七蔵（豊後国）松本為平（不明）阿部駒吉（豊岡村）の六名が参加した、その他に参加の同志は大分あった様である」と。

本文、登場人物の関係を図示する。関係者以外は省略。